

愛の偶然性＝必然性について  
—— スピノザと九鬼周造の愛の理論（上） ——

植 村 恒 一 郎

Über die Zufälligkeit = Notwendigkeit der Liebe (1)  
Die Lehre der Liebe in Spinoza und Kuki Shuzo

Tsuneichiro UEMURA

群馬県立女子大学紀要 第45号 別刷

2024年2月

Reprinted from

BULLETIN OF GUNMA PREFECTURAL WOMEN'S UNIVERSITY No. 45

FEBRUARY 2024

JAPAN

# 愛の偶然性＝必然性について

## —— スピノザと九鬼周造の愛の理論（上） ——

植 村 恒一郎

Über die Zufälligkeit = Notwendigkeit der Liebe (1)  
—— Die Lehre der Liebe in Spinoza und Kuki Shuzo ——

Tsuneichiro UEMURA

一夜寝て女役者の肌に触れ<sup>ぼりい</sup>巴里の秋の薔薇の香を嗅ぐ  
ドン・ジュアンの血のいくしづく身のうちに流るることを恥かしとせず  
やるせなき胸の愁をなんとせんタンゴに込めて君と踊らん  
(九鬼周造「巴里心景」1925)

### 序

九鬼周造はパリ遊学時代、たくさんの恋をして、それを詠んだ歌を『明星』に匿名で投稿した。そして同時に、恋愛論『「いき」の構造』を書き上げ、やがて主著『偶然性の問題』（1935）に結実する「偶然／必然」の問題に取り組んだ。したがってこの三者は密接に関連し、『偶然性の問題』の問題意識は、恋愛を概念的に把握することにあつたとさえ言える。一方、スピノザは自らの恋愛体験を語ることはなかった。ラテン語の堪能な一少女と恋をしたのではないとも想像されるが、分かっていない<sup>(1)</sup>。しかし彼の『エチカ』は、全体が「神への愛 amor erga Deum」で終わっているように、その真の主題は「愛」なのである。そこでは、「愛」が正確に定義され、愛の感情と欲望の受動性が徹底的に解明されている。九鬼の愛の理論の鍵は、「邂逅」＝出逢いという概念にあつた。一方、スピノザの愛の理論は、愛を、最初の知覚→驚き→欲望→感情の相互転移→相思相愛というプロセスで説明した。我々にとってのありうべき「愛の理論」は、愛の受動性の契機と、愛の偶然性＝必然性の両契機とを十全に捉え、両者を適切に総合したものでなければならない。ゆえに小論は、次のような構成からなる。

- 1 愛の始まり—タイプが個体へ受肉する（『エチカ』第3部・定理27と52）
- 2 相思相愛へ—喜びの感情が転移し合い、美的経験が相互に生起する
- 3 美的経験としての「邂逅」の偶然性＝必然性（九鬼周造の「離接的偶然」）[以上本号]
- 4 恋愛は、自由と必然の統一としての美的調和 [次号]

四節からなる本論を見る前に、スピノザと九鬼周造の愛の理論の全体像を、骨子の箇条書きで提示しておきたい。本論における各論点を、人間の生の全体の中に位置づけるためである。まずスピノザの愛の理論は、以下の通り（ただし植村の解釈により細部を補っている）。

（1）人間は生物であるから、とにかく生きること、すなわち「それ自身としてあり続けようとする」ことを至上命令とし、つねに「自己保存の努力」をする（第3部定理6、以下すべて第3部

から引用)。この「自己保存の努力」には、毎日を生きるための「個体の自己保存の努力」と、子どもを作るための「種の自己保存の努力」の二種類ある。

(2) そして人間には感情がある。「感情とは、それによって身体自身の活動力能が増大もしくは減少し、促進もしくは抑制されるような身体の変状である」(定義3)。そして、「喜び、悲しみ、欲望の三つが基本感情である」(定理11)。人間の身体は、喜びの感情があると、身体の完全性の度合いが増し、悲しみの感情があると、身体の完全性の度合いが低下する。自己保存の努力において、人間は身体の完全性をより高めようとするから、それはつまり、喜びの感情をより多く持とうとすることである。

(3) ところで、「愛」とは「外部の原因の観念が伴う喜び」の感情である(定理13)。したがって喜びを求める人間は、そうした「外部の原因の観念が伴う喜びの感情」をより多く持とうとし、そのために、当の「外部の原因」がより多く自分に現前することを求める。これが、人間はその本性からして「愛するもの」を求める理由である。

(4) 感情は徹底的に受動的なものである。「愛」の感情には「外部の原因の観念が伴う」とあるように、〈何かが好きだ〉という「愛」の感情は、自分が作り出したものではなく、気の付いた時にはすでに「外部の原因」によって自分の内に作り出されている。

(5) ある個人が別の個人を愛することは(=恋愛)、次のように説明される。自分が眼前の他者に愛を感じると、それは自分に生じた喜びであるから、喜びの表情が自分の顔の眼差しと微笑みに現れる。もしそのような自分を相手が見返したら、「われわれは、われわれに似ていてしかもこれまで何の感情も抱いたことない事物がある感情に変状されるのを表象すると、まさにそのことから[自分も]似た感情に変状される」(定理27)により、自分を見返した相手にも喜びの感情が生じ、それは相手の表情すなわち眼差しと微笑みに現れる。すると今度は、それを再び見る自分は、自分が原因で相手に喜びが生じたことを喜び、ますます嬉しくなり、こうして愛の感情は互いに往復し転移し合うことによって、さらに強まることが可能になる。(もちろんこれだけで相思相愛の恋愛になるわけではないが、最初のプロセスとして、二人の間には以上が必ず生じているはず。初めて会った誰かに親しみを感じ、互いに友人になり始める時には、以上のことが起きているのだから。)

(6) 「愛」とは「外部の原因の観念が伴う喜び」の感情であるから、向かい合っている二人の間では、自分が原因で愛の感情が生じたか否かは互いに分かる。(5)とは逆に、自分が相手に愛を感じて微笑んだのに、それを見た相手は微笑まなかったとすれば、相手は自分の愛を受け入れなかったことが分かる。恋愛は、片思いから相思相愛になるとは限らない。

(7) では、周囲にはたくさんの方がいるのに、なぜ「この人」を好きになるのか？ それは最初に出会ったときの印象で決まる。我々は、ありきたりのものに出会った時は特に驚かず、視線をすぐ流すが、しかし何か特徴のあるものに出会ったとき、我々は驚いてそれを見詰める。それが喜びを感じるもの(=それに近づき、それが欲しくなる)であれ、悲しみを感じるものであれ(=それを避けようとする)、大きな特徴があるものを我々は見詰める。それが喜びを感じさせるものならば、我々は喜びを増やしたいから、それをより長い時間見詰め、現前させようとする(定理52)。つまりより長い時間、それを自分の眼前に置こうとする。このようにして、我々は多くの人の中から、特徴のある人に視線が釘付けにされることによって、喜びの感情が増大し、「この人」を愛することになる。

(8) 「欲望」もまた、三つの基本感情の一つであるから、徹底的に受動的なものである。〈何かほしい〉という「欲望」の感情は、自由意志のように能動的なものに見えるかもしれないが、それは間違いであり、気の付いた時には、自分の中に「何かほしい」という感情がすでに存在している。それは自分が意図したわけではまったくなく、要するに、「何かが好きだ」という愛の感情

と、「その何かがほしい」という欲望の感情は、どちらも受動的であって、自由意志はここにはない。

(9) 我々が何かを「欲望」するのは、欲望される対象が「善い」からだ我々は思い込んでいるが、それは間違い。我々がそれを欲望するがゆえに、それを「善い」と呼ぶのである（定理9）。つまり、我々に受動的に生じる「欲望」こそが根源的所与であり、「よい／悪い」はその結果にすぎない派生的なものである。

(10) 人間にとって根源的所与である感情は、木霊のように人から人へと反響し合い、往復し、転移し合う。他者が喜んでいられるのを見ると、自分も嬉しくなる。「われわれは、われわれに似ていてしかもこれまで何の感情も抱いたことない事物がある感情に変状されるのを表象すると、まさにそのことから似た感情に変状される」（定理27）のだから。

次に九鬼周造の愛の理論は以下の通り（細部の解釈と実例は植村が補っている）。

(1) 理想の男女関係である恋愛は、「いき（粋）」なそれである。「いき」は、「媚態」（性的魅力の相手への提示）、「意気地」（凜とした強さ）、「諦め」（相手に執着しない）の三要素からなる。最初の二つは、シラーの「優美 Anmut と品位 Würde」にほぼ相当する。

(2) 「媚態」は自己の異性に対する可能的関係であり、可能性が可能性のままに絶対化されたものであって、アキレスと亀の悪無限性に類比される。自己と異性は無限に接近するが決して一体化はできない。恋愛は男女の最高によい関係であるが、結婚はそうではない。

(3) 以上を哲学的に概念化すると、恋愛は、「離接的偶然性」である「邂逅」＝出逢いを本質とする。離接的偶然性というのは、一定の全体性の中には、因果的必然性が消失する場所があり、そこに偶然が現れることである。たとえば、友人から来訪が事前に告げられ、屋外に車の止まる音がして、玄関のチャイムが鳴り、部屋のドアが開いて友人が現れた場合には、それは因果的必然性における結果である。しかし、何の前触れもなく友人が突然、部屋に現れたら、それは偶然である。必然と偶然はそのような関係にある。

(4) 因果的必然性は、「いつも必ずそうなる」という法則的事態だから、驚きがない。しかし、偶然の出現には驚きが伴う。愛の感情は、デカルトやスピノザが言うように、驚きから生成するものだから、そのような偶然の驚きが邂逅＝出逢いである。そして、その偶然性の契機は、恋愛関係に最後まで消えずに残り、恋愛における否定的契機として残存する。

## 1 愛の始まりータイプが個体へ受肉する（『エチカ』第3部・定理27と52）

かがみ込み数式を解く君が背の縫ひ目のほつれ見ており我は  
 （栗木京子『二十歳の譜』）

人は、いつ自分が眠りに落ちたのか分からないように、恋は、いつ始まったのか自分にも分からない。この歌の作者は京大理学部・生物学科の学生、「君」は数学科の学生だが、彼女は自分が彼を好きになったことに、まだはっきりとは気づいていないようにも見える。でも、恋というものは必ずこのように始まるもので、愛の感情はいつも、あたかも恩寵のように与えられる。そこには一切の自由意思は働いていないからである。人は誰かを好きになろうとして好きになるのではない。気づいたときにはすでに好きになっている。これが「愛」についての考察の、基本的な出発点である。

愛の感情はどのようにして自分の中に存在し始めるのだろうか。それは、ある他者に初めて出会ったとき、その人を眼前に知覚すること自体に新鮮な驚きがあり、なぜだか分からないが、すでにその人に強く惹きつけられていて、その人をずっと注視している、という受動的な体験として愛は始まる。普通なら特に注視しない学生服の背の縫い目のほつれだが、それを「見ており我は」という栗木京子の観想の受動的状態こそ、愛の始まりなのである。では、スピノザの『エチカ』第3部・定理52を見てみよう。(以下、引用は第3部だけなので、「証明」「備考」「系」も含めて定理番号のみを記す)

われわれは以前、他のものといっしょに見ていた対象、あるいは多くのものとの共通点しか持たないものとして表象する対象の場合、何か特異なところがあると表象する対象ほど長くは[そうした凡庸な対象] 観想しないであろう。……これに対し、対象の内にそれまで見たことのない何か特異な点を表象するとき……、精神はこの対象のみを観想するように決定される。……精神のこうした変状、言い換えれば特異な事物(個物)の表象は、精神の内にそれだけである限り、「驚き」と呼ばれる。(定理52)

ある個物に「何か特異なところがある」と感じる驚きが、我々をして、他の個物ではなくその個物のみを注視し、観想させる。ではなぜ、そもそもその個物に、「何か特異なところがある」と分かるのだろうか。それは、その個物に類似した多数の個物をすでに見慣れており、無意識のうちにそれとの比較がなされるからである。その個物には、今初めて時空的に出会ったのであるが、にもかかわらず、その個物に「何か特異なところがある」と感じるのは、類似した多くの個物をこれまで知覚し記憶している、その記憶がそこに重なるから、その個物は「特異」なのである。つまりそこには、初認の中に〈再認〉の契機が働いている。つまり、個体としての個体としては、たしかに初認であるが、その個体を一定の種に属するもの「として」見る限り、そこには種の〈再認〉の契機が含まれている。だからこそ、その個体にのみ存在する「何か特異なところ」が感じられる。我々が個体に初めて出会いそれを知覚するとき、我々はその個体に〈タイプ〉を一緒に再認しているから、そこに「何か特異なところ」が認められるのである。ではそれが再認だとして、その〈タイプ〉はいつ、どのように我々の内に存在するようになるのか。プラトンは、アイデアのようなものを魂は前世から知っており、それが〈タイプ〉として「想起される=アナムネーシス」と考えた。しかしスピノザはそうは考えず、多数の個体を知覚するうちに、それらの「類似」を通じて〈タイプ〉が心の中に形成されると考える。「類似」がタイプとしてあるからこそ、初めて遭遇する個体が「あっ、似ている!」という驚きによって、我々を注視と観想に誘う。これは我々の経験知からも言えることで、たとえば、道で、自分の知人に瓜二つの顔の人とすれ違ったら、思わずその人の顔を注視する。また、恋人ができたとき、それが嬉しくて友人に、「アイドルの○○君に似ている」とか、「女優の○○に似ている」とか説明することもある。つまり「類似」は、〈好みのタイプ〉を作り出すから、それは、注視を誘い、運命の出会いをもたらす、愛の感情を生み出す契機である。というより、より正確に言えば、人の個体は本来それぞれ違うから、その意味では「類似」は稀であるが、そうであるからこそ、類似した個体に出会うとき、それは特異な経験であり、価値を見出す体験であり、恩寵なのである。スピノザは次のように言う。

人間身体が同時に二つの物体から変状されることが一度でもあると、精神はあとでその一方を表象するとき、ただちにもう一方を想起するであろう(第2部定理18により)。ところで精神のもるもるの表象作用は、外部物体の本性よりもわれわれの身体の感情をより多く示す。ゆえにもし

身体、したがってまた精神が、二つの感情に変状されることが一度でもあると、精神はあとでその一方の感情に変状されるさい、もう一つの感情にも変状されるであろう。（定理14の「証明」）

どんな事物も、喜び、悲しみ、あるいは欲望の偶然的な原因になりうる。（定理15）

われわれは精神を喜びあるいは悲しみに変状させるのを常とする対象に、ある事物が似たところがあると表象すると、ただそのことだけから一たとえ対象との類似点があるから感情との作用因でなくても—その事物を愛しあるいは憎むであろう。……われわれは（仮定により）対象との類似点を、喜びあるいは悲しみの感情とともにその対象自体において観想したと想定されている。したがって（この部の定理14により）精神はその類似点の像に変状されると、ただちに喜びあるいは悲しみの感情にも変状されるであろう。したがってまた、われわれが類似点を認知するその事物は、偶然によって喜びあるいは悲しみの原因となるであろう。（定理16）

二つの対象の類似と、それが引き起こす感情との、いわば連合する関係がここにある。二つの対象が同時に知覚されることが一度でもあると、次の機会には、一方が知覚されると同時に、他方が連想される。これが、「類似」という関係の最初の生起である。ところで、対象が精神に知覚されるその表象は、その本性の一部が身体を通過して脳から精神にまで届くものだから、結果としてのその表象には、対象の本性だけでなく、通過点の身体の本性が、つまり感覚器官、神経、脳、そして感情が、透明なものとして一緒に重なっている。だから、一方の対象が知覚されると同時に、もう一方の対象が連想される時、表象に含まれる感情もまた一緒に伴っている。それゆえ、対象の類似の知覚は、感情が感情を呼び起こすことにもなる。つまり、Aという人物をかつて知覚した時に、自分に喜びの感情が生じたならば、次にそれに似たBという人物を知覚するときにも、やはり喜びの感情が伴う。そして、「外部の原因の観念を伴う喜びの感情」が「愛」なのだから、こうした類似の知覚を繰り返すうちに、「愛」の感情が明確に意識されるようになる。こうして自分の内に〈好みのタイプ〉が形成されるのである。

ここでスピノザが何回か「偶然」を述べていることに注意したい。個体としての対象を知覚することは時空的な一回限りの経験だから、そのつど知覚が生起することは自分には「偶然」である。しかし、対象の知覚すなわち表象に、対象そのものではない主観の感情が伴っているならば、偶然に知覚された類似する表象に前と同じ感情が伴うことは必然である。再認するのは同じ私なのだから、偶然に出現した個体の知覚に〈好みのタイプ〉として愛の感情が伴うことは、個と個の偶然的関係ではなく個と種の関係だから、ある人物との偶然の出会いなのに、〈好みのタイプ〉が必然的にその個体に受肉することがある。これが九鬼周造の言う「邂逅」である。愛における偶然と必然はこのような関係するが、ここで『エチカ』において抽象的に述べられたことは具体的にも生起することを、二つの文学作品に確認したい。

出逢いはどのように生じ、その時何が起きているのか、フロベール『感情教育』の有名な場面はこうである。青年フレデリックが船上で初めてアルヌー夫人と出会うシーン。

それは幻のようであった。彼女はベンチのまん中にたったひとりで腰かけていた。少なくとも、その目がまぶしいほどの光を発していたので、ほかの人の姿は見分けられなかった。彼が通りすぎると、女は顔をあげた。男は無意識に肩をかがめた。そして同じ側の、少し離れたところに行ってから、あらためて女を見つめた。……女が同じ姿勢のままじっとしているので、フレデ

リックは何度も左右を動き回って、自分が女を見つめていることを悟られまいとした……。これほどの小麦色をした素晴らしい肌、魅力的な体つき、光に透きとおるような細い指は一度も見たことがなかった。そして刺繡籠を何か不思議なもののように見つめていた。名前は何というのだろう。どこに住んで、どんな人生を送り、どんな過去をもっているのだろうか？ 彼女の部屋の家具や、彼女がこれまで身につけたドレスや、付きあっている人々などをみんな知りたい気がした。肉体的に所有したいという気持ちさえ、もっと深い欲求と、かぎりなく苦しいほどの好奇心のなかに消えてしまった。(小倉孝誠訳、小倉孝誠『『感情教育』歴史・パリ・恋愛』、みすず書房、2005年、118頁)

出逢いをこれほど見事に描いた作品は珍しい。フレデリックはアルヌー夫人を今初めて見たのだから、彼女の名前を知らない。しかし今、個体としての彼女に彼が見るものは、「小麦色の肌」「魅力的な体つき」「透き通るような細い指」など一般的な属性である。つまりフレデリックの〈好みのタイプ〉が、まさに個体としての彼女の肉体に受肉し、現存在するのを見ている。それは彼が今までに見たこともない「特異なもの」を見ることだから、**彼はその驚きに打ちのめされ、ひたすらその個体を観想することしかできない**。「肉体的に所有したい」という欲望さえも消えてしまうほど、それは受動的な経験である。スピノザの定理52で言われたことが、ここで生起している<sup>(2)</sup>。

ところで、「小麦色の肌」「魅力的な体つき」「透き通るような細い指」等々などの一般的な属性がなぜ彼の〈好みのタイプ〉であるのかは、書かれていない。おそらくフレデリックがそれまでに見た多数の女性の中に、それぞれの属性を持つ何人もの女性がいたので、そのつど愛の感情が生起し、それらの「類似」する属性が重なって、いわば「家族的類似性」(ウイトゲンシュタイン)としての〈好みのタイプ〉が作られたのだろう。スピノザが言うように、「類似」は人を注視・観想に導く重要な契機だからである。

「類似」が注視・観想を導き、それがいわば「地」になって、出逢いの特異性の「図」に結晶する様子を、もう一つ文学作品に例示してみよう。プーレスト『失われた時を求めて』において、主人公の青年が少女アルベルチヌに初めて出逢うシーンである。少女というものは、大人の女性とは違って、まだ明確な個人の顔をもっておらず、グループの一員の one of them として存在するときに、すなわち「類似」という関係性においてこそ、もっとも魅力的な存在として立ち現れる。それは1960年代の「スクールメイツ」から「AKB48」や「少女時代」などに至るまで、我々にもよく知られたことであるが、プーレストはそれを生き生きと描いている。『失われた時を求めて』第二篇「花咲く乙女たちのかげに」は、主人公の青年が、夏休みに、海辺の避暑地の高級リゾートに滞在する少女たちと偶然に出会う物語である。裕福な家庭の令嬢で15~17歳くらいの彼女たちは、いつもグループで一緒にいる。その活発で生き生きとした魅力に、主人公は大きな「驚き」を覚える。(以下、引用は鈴木道彦訳『失われた時を求めて4』、集英社文庫、2006年の頁数のみ示す)

そのとき、まだほんの堤防の突端あたりに五、六人の少女がかたまつて、まるで一つの奇妙な斑点を移動させるようにこちらに進んでくることが見えた。……まるでどこからやって来たのか、一群のカモメがゆっくりと浜辺を散歩しているような風情であった。……これら見知らぬ少女たちの一人は、手で自転車を押していた。ほかの二人は、ゴルフの「クラブ」を持っていた。そして彼女たちの身なりは、バルベック〔避暑地の名〕にいるほかの少女たちとかけ離れていた。……少女たちは、この上もなく柔軟な身体つきのためにどんな動作も自由自在だったし、おまけに残りの人類を心から軽蔑しきっているのだから、ためらうこともなく伸び伸びとまっすぐ前方に進んでゆき、好き勝手なことをそのままやっつけてのけるのだった。……見ればめいめいがまるで違った夕

イブでありながら、みなが美しさを備えている。……けれども私は、一人ひとりをまだ見分けることができなかった。…… [いろいろな特徴が] わずかに見分けられるばかりで、しかしこうした特徴でさえ、私はまだそのなかのどれ一つをも、ほかならぬこの少女の特徴であるというように特定の一人にしっかりと結びつけてはいなかった。……おそらく人生のなかで、揃いも揃って美しい彼女らのみが選ばれて友だちとしてグループをなしているのは、ただ偶然のせいだけではないだろう。……彼女たちが仲よくなったのは、一種の優美さとしなやかさと肉体的なエレガンスとが混じりあったものに彼女たちが惹かれた友人たちで、そうしたものこそ、魅力的な性格を備えた率直な人柄やいっしょに楽しい時が過ぎそうな人間を彼女らが思い描くときの唯一の形態なのだろう。(212～217頁)

少女たちは、それぞれが様々に魅力的な属性を備えているが、個体としての一人ひとは「類似」して、まだ互いに分離しておらず、魅力的な属性と個体とは混じり合い重なっている。この中の一人が、主人公とやがて恋をするアルベルチーナだが、個体として「アルベルチーナ」という固有名の少女に出会うのは、この海辺のグループとの出会いから少し後である。主人公が、画家のエルスチールの別荘に彼と一緒にいるときに、一人の少女が近づいてきた。

とつぜん、その道を軽やかな足どりでたどりながら、例の一団のなかにいた若い自転車の女がそこにあらわれた。黒い髪には、ふっくらと頬にかかるほど目深にポロ帽をかぶり、陽気な、そしていくぶん無遠慮な目つきをしている。そして奇跡的にも甘い望みで満たされたこの幸福の小径のなかで、彼女が木蔭から親しげな微笑えみの挨拶をエルスチールに向かって送るのが目にとまったが、それは私にとって、水と陸でできたこの世界を、それまでとうてい近づきたいものと見なしていた地帯に結びつける虹のかけ橋だった。そればかりか彼女は足もとめずに、画家に手をさしのべるために近づいてきたのである。……エルスチールは私に、彼女はアルベルチーナ・シモネという名前だと言った。(321頁)

主人公の、「それは水と陸でできたこの世界を、それまでとうてい近づきたいものと見なしていた地帯に結びつける虹のかけ橋だった」という言葉から分かるように、これが主人公とアルベルチーナとの運命的な出会いである「邂逅」であった。グループの「類似」の中に溶け込んでいた彼女は、今初めて、個体として、アルベルチーナとして、彼の前に浮かび出た。彼の視線は、彼女に釘付けになり、彼女を注視、観想した。「[彼女の] 顔立ちになんと決然とした、さわやかな、またあどけないものが見られることか！」(323頁)。こうして彼の中に愛の感情が生まれたのである。

## 2 相思相愛へ―喜びの感情が転移し合い、美的経験が相互に生起する

かくして先輩のそばに歩みよりながら、私は小さく呟いたのです。  
こうして出逢ったのも、何かの御縁。

(森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』2006)

青春小説『夜は短し歩けよ乙女』の最後は、京大一年生の女子学生「私」が、「先輩」との生まれて初めてのデートのために、今出川通りの喫茶店「進々堂」のドアを開けて入ったところで終わっている。ときめきの高鳴りの中で彼女が思わず呟いたのは、「こうして出逢ったのも、何かの御縁」であった。出逢いが「縁」であるのは恋愛の本質である。出逢いは「偶然」で、彼女にとって完全

に受動的な経験であるが、しかしそこには何かしら「必然」のニュアンスが加わっている。これが「縁」の意味である。

スピノザの愛の理論は、前節で見たように、「愛の始まり」を見事に捉えていた。相手が、類似の中から特異性として現れた驚きによって、相手に対する愛の感情が生じる。その過程が『エチカ』によって見事に解き明かされたことは、フロベールやプルーストに見た通りである。しかしこれはまだ愛の成就の半ばにすぎない。出逢いが「縁」として、さらに強い必然性が感じられるには、相思相愛にならなければならない。相手に対する愛の感情が生じるという「愛の始まり」から二人が相思相愛になるまでに、一体何が必要なのか。残念ながらこの点については、スピノザの愛の理論は完全ではない。スピノザは、愛という「喜び」の感情が相手に転移し、相思相愛になると考えているようだ。感情の転移はたしかに相思相愛への重要な契機で、不可欠の要素ではある。しかしそれだけではまだ足りないのではないか。というのも、転移は起こらないこともあるから。たとえば、Aと出会ったBの中にAに対する愛の感情が生起し、それをBがAに告白し、交際を申し込んだとしても、Aがそれを受けるとは限らない。むしろ現実には、Aが交際を断る可能性も多い。とすれば、「出会い」が「出逢い」や「邂逅」になり、さらに「縁」になるためには、さらに何が必要なのか。本節ではそれを考えて、スピノザの愛の理論を補うことにしたい。

相思相愛になるためには感情の転移が必要だが、それだけではなく、「出逢い」すなわち「邂逅」は、二人のどちらにとっても「美的経験」（厳密にはカント『判断力批判』のそれ）である必要があるのではないか。デカルトを始め多くの哲学者が、人間が人間を愛するのは、人間が美しいからだと言っている。

人間にとって人間ほど美しいものはない（キケロ『神々の本性について』）

また、デカルト、エドモンド・バーク、ヨゼフ・ピーパーなども、愛が美的経験であると明確に言っている。まずデカルトは『情念論』において、異性と出逢って感じる愛は「美しいものへの愛」であると述べている。

さて愛にしても憎しみにしても、その対象が……われわれの本性に適合しているとか、あるいはそれに反しているとか、われわれの内的感覚または理性が判断するものを、それぞれ「善」または「悪」と呼んでおり、われわれの外的感覚によってわれわれの本性に対する適不適が示されるものを、「美」または「醜」と呼んでいる。そしてその場合、外的感覚とは主として視覚をさすのであって、視覚だけで他の感覚のすべてを合せたもの以上の重要性をもつ。以上のことから、二種の愛が生じる。善いものへの愛と、美しいものへの愛である。後者を「快 agrément」と名づけることができる。……ひとはある年齢とある時期に達すると、自分を不完全なものに見なし、自分は一つの全体の半分にすぎず、異性のもう一人が残りの半分であらねばならないかのごとく考える。こうして自然によって、このあと半分の獲得が、ありとあらゆる善のうちで最大のものとして漠然と示される。ひとは異性の人たちを多数見るからといって、同時にその多くを望んだりはいしない。……むしろ、ある一人の人間において、同じときに他の人において認めるものよりいっそう自分の好む何かを認めると、精神はそのただ一人の人間に対して、所有しうる最大の善として追求しようとする。……このように快から生まれるこの傾向、この欲望は、前述の愛の情念よりもっとふつうに、恋の名で呼ばれている。（『情念論』85節と90節、野田又夫、谷川多佳子訳）

このように、デカルトは恋愛感情は「美しいものへの愛」であり「快」であると明確に述べており、視覚がそこで大きな役割を果たすという。またエドモンド・バークも同じことを述べている。彼の『崇高と美の観念の起源』（1759）によれば、美の起源は性的なもので、男女の**身体**の美は我々の愛の感情と一体である。

人間は動物のように自由気ままに生きるようには [=乱婚のこと] 作られていないので、人間にふさわしいのは、[AよりBが] 好きだから [Bを] 選ぶ、ということが出来る基準を持つことである。そうした基準はまずは感覚しうる性質でなければならない。……それゆえ、**愛**という名のこの複雑な情念の対象こそが、**性のもつ美に他ならない**のである。人間は、共通の自然法則によって、それが異性であるというだけで、異性一般に惹き付けられる。しかし、**ある特定の個人に愛情をもつのは、あくまでその個人の美によるものである**。私は美を、社交的性質と呼ぶ。（『崇高と美の観念の起源』第1巻、第10節「美について」、Burke, p36f.）

ドイツのカトリック神学者ヨゼフ・ピーパーも、『愛について』（1972）で、愛は視覚的な美において生起するという。

ロシア語には、「目で愛する mit den Augen lieben」（= ljubatsja）という言葉がある。つまり、視ることにおいて実現される場所の愛である。あるものがそれあるがゆえにそもそも愛の対象となるところの特質とは、美である。アウグスティヌスにも、「**美しいものだけが愛される**」「**われわれは美しいものだけしか愛しえない**」（『告白』『音楽論』）という言葉がある。あるいは、「**美とは視るに悦ばしきものなり pulchrum est quod visu placet**」という古代の定義もあり、このような同調的な熟視—それはいまだ〈所有〉への意志を含まない—がなければ、真の愛というものはありえないことになる。（『愛について』稲垣良典訳、エンデルレ書店、24頁）

このように、前節に見た二人の「出逢い」は、相互にとって美的経験でなければならないだろう。デカルトは、それが視覚的な経験であり、かつ「快」であると明確に述べた。このような「美」の在り方を正確に解明したのがカント『判断力批判』である。スピノザは「愛は、外部の原因の観念を伴う喜びの感情」と定義したが、その「喜びの感情」は人間同士の愛の場合、デカルトやカントの「快」の感情に相当するであろう。『判断力批判』における美的経験について瞥見してみよう。

カントは、「認識判断」や「道徳判断」とは違う「美的判断 ästhetisches Urteil」という判断を考える。「美的判断」は認識ではなく、認識への途上のような「想像力の遊び」の状態である。たとえば、咲いているバラの花を近寄って見たら「美しい！」と感じた。ここで何が起きているのか。感覚器官である眼を通してバラが視覚されるのだから、外界からの感覚を受け取っている。だがそれは、バラの視覚像に「美しい」という性質が備わっているのではない。食べ物ならば、味覚的な「おいしさ」が食べ物に備わっており、それを受動的に感覚するのが「おいしい」だが、バラを「美しい」と感じるは、それとは少し違う。「これはバラだ」と認識するのとも違う。植物学者なら、バラの花を見て、「あ、これは〇〇バラだ」と専門的に認識することもある。だが、「このバラは美しい」という美的判断は、それとは違う。認識というのは、外界から得られた感覚と、すでに主体の側に用意されている概念が噛み合うことで成立する。ガチっとかみ合うから、そこに「遊び」の余地はない。しかし、「このバラは美しい」という判断の場合、そのバラについての正確な概念を持っている必要はない。それどころか、それが「バラ」種ではなく別の種の花であったとしても、つまりそれは「バラ」という思い込みが違っていたとしても、「このバラは美しい」という

美的判断は成り立つ。つまりそこでは、概念は暫定的にしか機能していない。「このバラは美しい」と判断する人は、それを「バラ」としてではなく、少なくとも「花」として見ていれば、そう判断することができる。

「このバラは美しい」という美的判断は、眼前の花の認識ではなく、眼前の花の知覚において自分に生じている美的体験、美的経験を表現している。それは眼前の花の知覚ではあるが、そこに概念は働いておらず、想像力がその花を心の中で描いているのであり、その描く「遊び」としての心の筆の動きが、快の感情を生み出すのが、美的経験である。バラの花を見るとき、あるいは芸術作品を鑑賞するとき、想像力は心の中で対象を描いているが、出逢いにおいても同様に、相手を心の中で描いているだろう。その描く心の動きが、自由な遊びであり、それが、感性、悟性、想像力など、心のすべての能力を調和的に活性化するから、そこに快の感情が生まれる。それを言語化したものが、「このバラは美しい!」「あなたは美しい!」という美的判断なのである。

邂逅においても、それが生じている。フレデリックが初めてアルヌー夫人に逢ったとき、彼は彼女に「小麦色の肌」「魅力的な体つき」「透き通るような細い指」を認め、感嘆した。また、『失われた時を求めて』の主人公の青年は、まずアルベルチーナを含む少女たちに「一種の優美さとしなやかさと肉体的なエレガンスとが混じりあったもの」を見て感嘆し、初めて個体として眼前に現れたアルベルチーナには「黒い髪には、ふっくらと頬にかかるほど目深にポロ帽をかぶり、陽気な、そしていくぶん無遠慮な目つき」を認め、彼女の「顔立ちになんと決然とした、さわやかな、またあどけないものが見られることか!」と感嘆した。これは彼女を認識したというよりは、彼女に美的体験をしたのである。なぜなら、この出逢いでは、まだ彼女の名前も年齢も住居も知らないから、彼女については正確な概念は持たず、「女」や「少女」という大ざっぱな概念しか持っていないからである。カントは、美的経験においては、「規定的判断力」ではなく「反省的判断力」が働いているという。「規定的判断力」とは、普遍を個別に適用する判断、普遍から個別に向かって働く判断である。それは概念がすでに持っている時に働く判断である。しかし「反省的判断力」は、普遍がまだ概念として与えられていないにもかかわらず、個別から普遍へ向かって働く判断であり、それは想像力の動きに対応している。つまり、アルヌー夫人やアルベルチーナとの出逢いにおいては、二人の名前や正確な概念は所有されていないから、その判断は、知覚された個別から普遍へ向かい、「この眼前の人こそ、私の求めていたタイプだ!」という個別から普遍へ向かう美的判断なのである。

美的経験では、感覚や概念ではなく想像力が主役を務める。想像力は、感覚のように完全に受動的でもなく、概念のように完全に能動的に働くのでもない。半分は感覚に関わり、半分は概念に関わりながら、動きまわり、遊びまわるのが想像力である。その動きが軽やかで快く感じられるので、そこに快の感情が生まれる。出逢いにおいて初めて相手を見たとき、「もうすでに相手を好きになっている」自分を見出すのが、愛の受動的感情であり、そしてそれは、喜びと快の感情でもあった。出逢いが美的経験であるならば、そこに想像力の動きが含まれているから、それは完全に受動的ではなく、受動的な中にも能動的な契機がすでに働き出している。欲望もまた、「相手をすでに欲望している状態」の自分を見出すのだから、全体としては受動的経験ではあるが、そこには「欲望している」という能動的な契機もいくらか含まれている。出逢いは美的経験であり、美的経験には能動的な契機が含まれるから、「好きだ」という受動的感情は、「欲望している」という能動的契機を含むことができる。愛の感情はこのように捉えられるべきものである。スピノザは『エチカ』第3部のある個所で次のようにいう。

精神は自己自身とみずからの活動力能を観想するとき嬉しくなり、その喜びは自己とみずからの

活動力能をより判明に表象すればするほどそれだけ大きい。（定理53）

美的経験には「想像力の自由な遊び」の快があるが、それは、スピノザがここで言う「みずからの活動力能を観想する喜び」に近いだろう。スピノザが「より判明に」と言っているように、我々の認識が完全に「判明」になった暁には、第5部で言われるように、万物の完全な認識は「神への愛」に高まる。そこでは、人間の感情は理性に媒介された「能動感情」にもなっている。一方、恋愛の「出逢い」における「相手への愛」には、相手の完全な概念が欠けているから、それは「神への愛」より劣る感情であるかもしれない。しかし、出逢いが美的経験であるなら、カントに見たように、そこに「想像力の自由な遊び」すなわち「戯れるという軽快な遊び」（『判断力批判』原書初版31頁）があり、「自由な遊びを営んでいるという感情の状態」（同28頁）という能動的な契機が含まれた感情になっている。この「快の感情」が、「好き！」という感情を「欲望」へと高めるのである。

### 3 美的経験としての「邂逅」の偶然性＝必然性（九鬼周造の「離接的偶然」）

（ロミオ） え、僕の唇から君の唇に罪が移った？ 何てやさしく咎めてくれるんだい！  
じゃ、僕の罪を返してもらおうね。[またキスをする]

（ジュリエット） あなたのキスって、ちょっと理屈っぽいね

（シェイクスピア『ロミオとジュリエット』）

相思相愛には、二人の間で「愛の喜びの感情」が相互に転移する必要がある、相互に転移しても、それが必然的に相思相愛を意味するわけではない。転移があっても、まだ互いに片思い、という状態もありうる。相手の表情に「自分が原因となって生じた喜びの感情」（スピノザ）を読み取っただけでは、それはまだ兆候であって、それが兆候以上の何かになったときに、愛は初めて本物の相思相愛になる。その兆候以上の何かとは、相手の愛を獲得する賭けに勝ったという確信がもたらす喜び、すなわち蓋然性が因果性にランクアップして、偶然が必然に引き寄せられた喜び、〈自分が原因で〉相手に愛の感情が生じたという因果性もたらす喜びである（次節で見るように、これが「自由」の本義である）。二人がともにこの「賭けに勝った」という意識を持つときにこそ、恋愛は真に現実態となる。ロミオとジュリエットの会話は、それを見事に示している。ロミオに予想通りにキスされたジュリエットは、「あなたの罪が私に移っちゃったじゃないの」と、優しくロミオを「非難」する。その非難に答えてロミオは、罪を返してもらうために、もう一度ジュリエットにキスをする。これは喜びの感情の相互転移よりもさらに強い、賭けに勝ったという確信の喜びの相互転移である。だからそれを受けての、「あなたのキスって、ちょっと理屈っぽいね」というジュリエットの応答は、「あなたの愛を私は受容した」という最終的なサインである。こうして偶然性は、因果を介した相互転移によって、必然性に引き寄せられる。ロミオとジュリエットのこの会話をもう少し前から引用してみよう。そこには恋愛に本質的な契機がすべて含まれている。（訳は植村、原文は註(3)に）。

（ロ） もし僕の卑しい手が君に触れて、この聖堂をけがすなら／こうやって償おう、僕の唇は、ここに控えている／はにかみやの巡礼だ、そのやさしい口づけで／乱暴に触れた君の手を、慰めるよ

（ジュ） あら巡礼さん、それじゃ、あなたのその手がかわいそう／お行儀よく、こんなに信心深い

じゃないの／そもそも聖者の手は、巡礼さんが触れるためにあるのよ／そして、手と手を触れるのが、巡礼同士の口づけよ

(ロ) でもね、聖者にも唇があるんじゃない？ 巡礼にも唇があるんじゃない？

(ジュ) あるわよ、巡礼さん、でもね、それはね、お祈りに使うの

(ロ) おお、では僕の聖者ちゃん、僕らの手がしたことを唇にもさせてね／僕の唇はお祈りするんだ、だから許して、信仰が絶望にならないように

(ジュ) お祈りは許すわ、でも聖者の心は動かないかもね

(ロ) では、動かないで、お祈りの効(しるし)を僕が受け取る間は [さっとキスする]、さ、これで僕の唇の罪は、君の唇によって、浄められた

(ジュ) じゃ、あなたの浄められたその罪が、私の唇にあるのね

(ロ) え、僕の唇から君の唇に罪が移った？ 何てやさしく咎めてくれるんだい！／じゃ、僕の罪を返してもらおうね [またキスをする]

(ジュ) あなたのキスって、ちょっと理屈っぽいのね

この有名なダンス・パーティの会話は、二人の視線が初めて合ってから、ファーストキスまで数分という、ほとんど神話的な恋愛のクライマックスである。「そして、手と手を触れるのが、巡礼同士の口づけよ And palm to palm is holy palmers kiss」は、『ロミ・ジュリ』のもっとも美しい科白の一つであり、このとき二人は両手の手のひら (palm) をパーンと触れ合わせるか、それとも体を伸ばして片手同士をかすかに触れ合わせるか、演出家が苦心するシーンである。彼女のこの発話は、まさに言語哲学者オースティンの言う performative utterance であり、「いいわよ、キスしましょうよ！」とジュリエットは言っているのだ。ロミオとジュリエットの恋が素晴らしいのは、賭けに勝とうとする情熱がジュリエットの方がロミオよりわずかに高いことにある。ジュリエットはロミオにつかまったように見えるが、ジュリエットもロミオをつかまえている。少し後のバルコニーの会話では、それがさらにはっきりするが(彼女はロミオが隠れて聴いていることを知らず、愛を告白する)、いずれにせよ、この会話でも二人は激しい駆け引きをしている。「お祈りは許すわ、でも聖者の心は動かないかもね」とジュリエットが言うように、この駆け引きをリードしているのはジュリエットであり、テンションの高いほとんど一瞬のゲームの中で、二人はともに賭けに勝つ。そう、これが恋愛の究極の姿なのだ。すなわち、愛する／愛されるという能動・受動の激しいベクトルが、双方向から衝突して均衡する。アダム・スミスの『道徳感情論』に、「人間の幸福は、主として、愛されているという意識から成り立っている」という有名な言葉があるが、これは、こと恋愛に関しては、事柄の半面しか捉えていない。恋愛には、〈賭けに勝った〉という喜びの感情、受動的ではない〈自由の喜び〉の感情が不可欠である。最後にジュリエットは、「あなたのキスって、ちょっと理屈っぽいのね」と言うが、そもそも、「まず口じゃなくて、手がいいわ」とか「罪が私に移るじゃないの、なんたらかしたら」等と、理屈っぽい文脈を設定したのはジュリエットである。この文脈にままとロミオがのせられてキスしたことに対する、ジュリエットの最終的な勝利宣言が、「あなたのキスって、ちょっと理屈っぽいのね」である。だから我々は、「よく言うよ、理屈っぽいのは君の方じゃん」と、ジュリエットに言いたくもなる。それにしても、13歳の少女ジュリエットの、恋の駆け引きの卓越性が、彼女の魅力をますます高めているのが『ロミ・ジュリ』なのである。

スピノザでは、愛の始まりは、「～が好きになっている」自分に気づくという受動的な感情であった。そして、その次の段階の「相手を自分のものにしたい」という欲望も、「相手を欲望して

いる」自分に気づくという、やはり受動的な感情であった。「欲望」を徹底的に受動的な感情として捉えたのが、スピノザの大きな功績である。「欲望」は「喜び・悲しみ・欲望」という「三つの基本感情」の一つだからである（『エチカ』第3部・定理11）。しかし恋愛においては、片想いはこの二つの契機で成立するが、相思相愛には、さらに加えて、「自分が原因で相手の愛を獲得した」という達成感、〈自由の喜び〉の感情が含まれている。この三つの契機が恋愛を成り立たせているのである。ところでスピノザも、たしかにこの三番目の「自由の喜び」に触れてはいる。

自由なものとして表象される事物に対するわれわれの愛と憎しみは、必然的な事物に対する場合と比べて一原因は等しいとしても一より大きくなければならぬ。……人間は自分たちを自由なもののみならずからこそ、相互に対して他の事物に対してよりも大きな愛あるいは憎しみを抱くことになる。のみならず、そこに感情の模倣も加わる。（『エチカ』第3部・定理49）

ここで言われているように、相手が物やペット動物の場合などに比べて人間である場合は、愛の喜びはさらに大きい。あるいはまた、いいなずけのように相手が決められている場合よりも、自由恋愛でパートナーを獲得する方が愛の喜びは大きい、ということも意味するかもしれない。しかしここでは、「人間は自分たちを自由なもののみならずから」とは言われるが、「人間は自由な存在だから」とは言われていない。『エチカ』は全体として、自由よりは必然性を強調するので、スピノザの愛の理論は、「～が好きになっている自分に気づく」「～を欲望している自分に気づく」という、自分では自由にならない受動的な愛の感情の喜び、つまり必然的な愛の感情の喜びを強調し、第三の「自由の喜び」はやや後景化している。それに対して、この三つの契機をバランスよく総合したものが、九鬼周造の愛の理論である。

小論の冒頭に挙げた九鬼の「巴里心景」1925の三つの歌を見てみよう。「一夜寝て女役者の肌に触れ<sup>ほりい</sup>巴里の秋の薔薇の香を嗅ぐ」「ドン・ジュアンの血のいくしづく身のうちに流るることを恥かしとせず」には、恋を成就させた勝利感がある。愛される喜びや幸福の感情ではなく、愛する喜びや幸福の感情が詠まれている。しかし「やるせなき胸の愁をなんとせんタンゴに込めて君と踊らん」はどうか、そこには大いに異なる感情が詠まれている。それは、九鬼にとって理想の恋愛である「いき」の三つの契機のうちの一つ、「諦め」の感情である。どんな恋愛にも、必ず感情の醒める時があり、恋は必ず終わる。これは恋が「偶然性」に基づいていることの必然的な帰結である。そのことを、恋をする者は最初から自覚していなければならない。「君とタンゴを踊る」最中にも、九鬼は胸中の「やるせなき愁い」を振り払うことができない。恋が熱ければ熱いほど「愁い」もまた深い。2022年に、千葉雅也はツイッターで次のようにつぶやいた。

愛というのは単純に肯定し合うことではなく、互いの否定性を飲み込み合うことだ。

（千葉雅也）

千葉の本にある言葉かもしれないが、九鬼の「いき」に通じるものがある。愛は、それが深ければ深いほど、そこに「飲み込まれている否定性」も深い。その「否定性」がつねに意識されていることが「いき」の要諦である。九鬼の「いき」は、理想の恋愛の在り方であり、彼は次のように「いき」を説明している。「いき」は漢字で表記すれば「粹」であるが、英訳でも「Iki」と訳されるように、それにぴったり相当する西洋語はない。フランス語の「chic」「élégant」「raffiné」などと意味の一部は重なるが、完全には重ならない。九鬼によれば、「いき」は次の三つの契機からなる。

- (1) 媚態 (=自分の性的魅力を相手に示すこと)
- (2) 意気地 (=凛とした強さがあること)
- (3) 諦め (相手に執着せず、明日この恋が終っても、さっぱりとさわやかに別れること)

それをまとめると、「いき=粋」とは、「垢抜けて (諦め)、張のある (意気地)、色っぽさ (媚態)」と定義される (『「いき」の構造』23頁)。その三要素をさらに説明して九鬼は言う。「媚態とは、一元的の自己が自己に対して異性を指定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である。そして「いき」のうちに見られる「なまめかしさ」「つやっぽさ」「色気」などは、すべてこの二元的可能性を基礎とする緊張にほかならない (同、17頁)。九鬼の言う「媚態」と「意気地 (意地)」は、シラーの言う「優美 Anmut」と「品位 Würde」にほぼ対応する。しかしシラーには九鬼の「諦め」はない。そして九鬼の言う「媚態」は、とてもユニークでもある。すなわち「媚態」は、「自己と異性との間の可能的関係」であるとか「緊張」であると言われている。「現実的關係」ではなく「可能的關係」であるとは、どういうことだろうか。

媚態の要は、距離を出来得る限り接近せしめつつ、距離の差が極限に達せざることである。可能性としての媚態は、実に動的可能性として可能である。アキレウスは「そのスラリと長い脚で」無限に亀に切迫するがよい。しかし、ゼノンの逆説を成立せしめることを忘れてはならない。けれど媚態とは、その完全なる形においては、異性間の二元的動的可能性が可能性のままに絶対化されたものでなければならない。「継続された有限性」を継続する放浪者、「悪い無限性」を喜ぶ悪性者 (あくしょうもの)、「無窮に」追跡して (たお) れないアキレウス、この種の人間だけが本当の媚態を知っている。かような媚態が「いき」の基調たる「色っぽさ」を規定している。(同、17~18頁)

この文章は『「いき」の構造』の核心であり、愛の感情を生起する性的魅力すなわち「色っぽさ」の本性に重要な規定を与えている。それは絶対に到達できない「悪い無限性」であり、可能的な無限、「可能性が可能性のままに絶対化されたもの」である。この「悪い無限性」を喜ぶ悪性者だけが、自由な遊びとしての恋愛を楽しむことができる。「可能性が可能性のままに絶対化された」ので、愛は究極の完全現実態になることはできない。恋愛のさ中にも、人間は自由でありたいと願う。だから、恋愛には「意気地 (=意気)」としての強さが含まれる。「いき (意気) は、媚態でありながらなお異性に対して一種の反抗を示す強みをもった意識である」(18頁)。恋愛は、相手に降参して完全に身を任せてしまうのではなく、相手に対する反抗、否定性をどこまでも秘めている。だから、今日は相手が好きでも明日は嫌いになるかもしれない。それゆえ、「諦め」もまた、恋愛に不可欠の契機である。「諦めとは、運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心である。「いき」は垢抜けがしていなくてはならぬ。あっさり、すっきり、瀟洒たる心持でなければならぬ」(19頁)。相手から突然別れを切り出されても、狼狽したり、泣いて跪いたりしてはならない。「そうだね、残念だけど」と、あっさり、すっきり、さっぱりとした笑顔で別れるべきである。要するに、「いき」な恋愛とは、相手の他者性・否定性がどこまでも残る中で、無限に相手に近づこうとする狂おしいまでの運動、無限に近づきけれども決して一体にはなれないが、それを知った上で自由な遊びを楽しむ男女の関係である。これが最高の男女の関係であることはおそらく真理であろうが、誰にでも可能なものではなく、なかなかハードルが高いだろう。

以上が、九鬼の「いき」な恋愛であるが、これを偶然性・必然性の観点からみるとどうなるだろうか。九鬼は、必然性を「定言的」「仮言的」「離接的」の三様態に分類し、それに対応して、「定言

的偶然」「仮言的偶然」「離接的偶然」の三様態を考える。そのうちで、恋愛の「邂逅」に関わるのは「離接的偶然」である。

**邂逅の核心的意味は邂逅しないことも可能であること、すなわち「無いことの可能」ということに存している。……偶然性の根源的意味は、一者としての必然性に対する他者の措定ということである。……偶然性とは一者と他者の二元性のあるところに初めて存在する。……個物の起源は一者に対する他者の二元的措定に遡る。邂逅は独立なる二元の邂逅に他ならない。（『偶然性の問題』254頁）**

「邂逅」すなわち「出逢い」とは、まったく異なる二つの因果的系列が交差することであり、それが「偶然性」に他ならない。我々一人ひとりの人生は、時空的に「まったく異なる二つの因果系列」なのだから、それが交差するかどうかは偶然であり、「邂逅」は「邂逅しないこと」とほとんど表裏一体である。そして九鬼は、西田幾多郎の「永遠の今」を念頭に、時間性と偶然性について、こう述べている、「絶対無なり永遠の今なりが、自己を限定するか、しないかに偶然性が固着している」（『人間と実存』171頁）。

現在において現実としての偶然を正視することが根源的一次的の原始的事実である。ついで二次的に未来への動向として未来的な可能を斜視し、過去よりの存続としての過去の必然を斜視する場合が考えられる。……正視されうる様相は一点において現在する偶然性だけにしかない。……体験の直接性にあつては、偶然は、正視態として、直態として、現在に位置をもつ限り、時間的優位を占めたものである。また瞬間としての永遠の現在の鼓動にほかならないものである。（『偶然性の問題』212頁）

ここで明らかなように、未来＝可能性、過去＝必然性であるのに対して、出逢い＝邂逅の偶然性はつねに現在であるので、「永遠の現在」たりうる資格を秘めている。そしてこの邂逅の偶然性は我々の人生において特別に重い意味を持っている。「偶然が人間の実存性にとって核心的全人格の意味をもつとき、偶然は運命と呼ばれる」（同、224頁）。つまり、「核心的全人格の意味をもつ偶然」が「運命」であり「永遠の今」なのである。この出逢い＝邂逅が「運命」であり「永遠の今」であるとは、どういうことであろうか。それは「偶然」が過去・現在・未来という時間性にあることを意味し、邂逅が「離接的偶然」であることは、恋愛における偶然と必然の関係が明らかになり、さらにキルケゴールのいう、恋愛が自由と必然の統一であることをも明らかにする。邂逅、永遠の今、離接的偶然、偶然と必然、自由と必然の統一、これらの相互の関係は次節で扱うことにしよう。[続く]

#### 註

\*使用テキストは、『エチカ』は、ゲプハルト版全集、シュテルンの独訳（レクラム文庫）、畠中尚志の邦訳（岩波文庫）、上野修の邦訳（岩波版スピノザ全集第Ⅲ巻）。『エチカ』の引用は上野訳だが、「conatus」のみは「自己保存の努力」と訳した。九鬼周造は、岩波版全集第一巻と第二巻、クラークによる『「いき」の構造』の英訳。キルケゴール『あれか、これか』はFauteckの独訳。それ以外の文献は文中や註で示す。文中の太字の表記はすべて植村。

- ・ Spinoza: *Ethica* (Spinoza Opera, Bd 2, herausgegeben von Carl Gebhardt, Winter, 1925)
  - ・ Spinoza: *Die Ethik* (Lateinisch und Deutsch, übersetzt von Jakob Stern, Philipp Reclam, 1977)
  - ・ スピノザ: 『エチカ』 (畠中尚志訳 岩波文庫 1951)
  - ・ スピノザ: 『エチカ』 (上野修訳 スピノザ全集・第三巻 岩波書店 2022)
  - ・ 九鬼周造 『「いき」の構造』 『巴里心景』 (九鬼周造全集・第一巻 岩波書店 1981)
  - ・ 九鬼周造 『偶然性の問題』 (九鬼周造全集・第二巻 岩波書店 1980)
  - ・ Kuki Shūzō: *The Structure of Iki* (tr.by John Clark, 1997, Power Publications Sydney)
  - ・ S.Kierkegaard: *Entweder - Oder*, (tr. by Heinrich Fauteck, 2005, dtv.)
  - ・ Edmund Burke: *A Philosophical Enquiry into the Sublime and Beautiful*, (2015, Oxford World's Classic)
- (1) 青年スピノザは、自由思想家であった師のファン・デン・エンデンからラテン語を学び、ときには父の代講をしたエンデンの娘のクララ・マリアからも学んだ。彼女は12歳でラテン語を流暢に話した天才少女。ルカス・コルレス篇 (『スピノザの生涯と精神』、渡辺義雄訳、理想社、1962、147頁)
- (2) スタンダールの言う「愛の結晶作用 cristallisation」 (=あばたも笑くぼに見える) もまた、愛の感情における驚きの契機を言い換えたものである。
- (3) 原文は次の通り。(R) If I profane with my unworhiest hand/ This holy shrine, the gentle sin is this./ My lips, two blushing pilgrims, ready stand/ To smooth that rough touch with a tender kiss. (J) Good pilgrim, you do wrong your hand too much,/ Which mannerly devotion shows in this./ For saints have hands that pilgrims' hands do touch,/ And palm to palm is holy palmers' kiss. (R) Have not saints lips, and holy palmers too? (J) Ay, pilgrim, lips that they must use in prayer. (R) O, then, dear saint, let lips do what hands do! / They pray: grant thou, lest faith turn to despair. (J) Saint do not move, though grant for prayers' sake. (R) Then, move not while my prayer's effect I take. [He kisses her] / Thus from my lips, by time my sin is purged. (J) Then have my lips the sin that they have took. (R) Sin from my lips? O trespass sweetly urged! Give me my sin again. [He kisses her] (J) You kiss by th' book.